

平成 22 年 4 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19500223

研究課題名 否定表現の認知的・身体的基盤についての動画を用いた反応実験に基づく研究

研究課題名 Negation as Embodied Cognition – An Experimental Study on Audio-Visual Basis

研究代表者

竹内 義晴 (TAKEUCHI YOSHIHARU)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：10163388

研究成果の概要（和文）：

認知言語学的に考えると、否定の言語表現は否定の認知を映し出しているはずである。しかし、否定の認知とは何かということをこれまで言語研究では、言語表現についての考察から研究者の主観に依拠して解釈しようとしてきた。本研究では、否定の言語表現に共起する身体表現に注目し、ビデオ録画したインタビューの分析と、実験（プライミングテスト）という実証的な手法によって、否定の認知のネットワーク構造を確認しようとした。

研究成果の概要（英文）：

From the cognitive linguistic point of view, the linguistic expressions of negation could be understood as some kind of projection of negative cognitions. In the linguistic tradition we mainly speculated about the nature of that negative cognition trusting our subjective interpretation about linguistic expressions. In our project, we have clarified that negative cognition by two empirical ways. We analyzed co-occurring bodily expressions of negative linguistic expressions in our video-recorded interviews on the one hand and conducted priming tests on the other hand.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：認知言語学

科研費の分科・細目：情報学・認知科学

キーワード：否定の認知、認知の身体基盤、身振り

1. 研究開始当初の背景

竹内 2004 は、否定の言語表現に投影されている否定の認知について、振り払いや拒否などの、動物として引き継いできた様々な否定にかかわる認知が結びついたネットワーク構造をなしているという説を提案した。

これは、従来からの、否定の意味を命題の真理値をひっくり返す論理演算的な操作であるというとらえ方と対立するものであるが、人間の認知を身体的に動機づけられたものであるとする認知言語学の主張、言語表現と身体表現は互いに補完しながら、人間の認知・コミュニケーション活動を作り上げているという、最近のジェスチャー研究の動向（例えば、マクニール 2005）とつながっていく考え方である。

しかし、この提案は、基本的に否定の言語表現についての考察に基づくものであって、理論を裏づけるための、客観性を備えた、言語外からの強い証拠が薄弱であるという難点を抱えていた。

2. 研究の目的

私たちは、上記研究の弱点である、理論を支える言語外的な証拠を言語表現に付随する身体表現に求めることを考えた。身体表現は、言語表現と並ぶ認知の窓口なのであり、言語表現と身体表現の相関性について考察することによって、私たちは、言語表現に投影されている認知の実体に迫ることができると考えたのである。

また、このことが可能であることが明らかにされることによって、私たちは、否定の認知の実体に迫ることができただけではなく、これまで、言語データにのみ基づく考察に頼っていた言語研究に、実証的な方法の可能性を開くことができると考えたのである。

私たちの研究の対象は、日本語とドイツ語における否定の認知である。私たちは、否定の疑問に対する答え方が異なり、また、文化的に、日本語では否定を表現するのが苦手であるが、ドイツ語ではそうではないといわれる、などの違いがあるとされる、日本語とドイツ語の否定の問題について、その認知的な実体としての共通性と違いを具体的に明らかにしようとした。

3. 研究の方法

私たちの研究方法は二段階の構成を取った。まず第一段階では、私たちは、日本語とドイツ語の母語話者を対象にほぼ同じ内容のインタビューを行い、それをビデオ録画した。インタビューの内容は、質問にそれぞれ、「拒否」、「打ち消し」、「嫌悪」などの応答が予測できるように工夫したものである。私たちはこの録画された会話を分析し、どのような身振りが否定の言語表現に付随して現れるのかを記述し分析した。

第二段階では、私たちは、第一段階で有意であると認められた動作について、プライミングテストのソフトウェアを用いて、ある談話の状況におけるある質問への対応として、ある身体表現が適切であるかどうかを、適切、まあ適切、あまり適切ではない、不適切の4段階で判断させた。実験は、日本語とドイツ語の母語話者を、それぞれ20名と30名、被験者にして行われた。

実験結果は、それぞれの状況と質問の組み合わせについて、5つの身体表現の反応としての適切さの数値を示すレーダーグラフとして表示された。私たちは、この表示された結果を、それぞれの言語について、分析し、考察を加えた。

4. 研究成果

私たちはまず、日本語の母語話者に対するインタビューを分析した。日本語の否定表現には予想通り、「強い首ふり」、「弱い首ふり」、「うなづき」、「しかめ顔」が観察された。「強い首ふり」は、自分の体面にかかわるようなことを質問者が想定している場合に多くあらわれ、また「うなづき」は、質問者が想定している否定を含む想定を回答者がそのまま受け入れる場合に観察された。

この研究では、私たちが予期していなかった興味深い身体表現が多く観察された。「首傾げ」の動作が、否定の言語表現に伴って頻繁に現れることが分かったのである。この「首かしげ」の身体表現は質問の内容にかかわる否定と言うよりも、そもそも質問に対応して口にすべき回答にたどり着けない、という態度の表れであると解釈される。日本語では、この首傾げの身振りは、さらに、コミュニケーションにおいて、相手の想定していることを直接に打ち消したり、拒否したりする

ことによる摩擦を避けるための緩衝手段として使われることも明らかになった。

この成果は、認知への身体を手掛かりにしたアプローチとして第8回日本認知言語学会で発表され、興味深い発表であるというコメントをいただいた。また、日本語に特有のコミュニケーションの問題として、第35回日本独文学会語学ゼミナールで発表され、同学会の査読付欧文機関紙に論文として掲載された。

ドイツ語の母語話者に対するインタビューの分析の結果、やはり、ドイツ語でも、日本語と同じような身体表現が、否定の言語表現に付随して観察されることが分かった。ドイツ語のインタビューの分析で明らかになった興味深い事実は、ドイツ語でも、「否定」に伴う「うなづき」の身体表現が観察されるということである。日本語におけるのと同様に、ドイツ語においても、否定の認知が含まれる内容を、そのままそれとして受け入れられることがあるのであり、そのことがコミュニケーションにおいては、「うなづき」の身体表現によって示されることが分かったのである。

また、ドイツ語においても否定の言語表現に「首かしげ」の身体表現が随伴することが観察された。私たちの分析によれば、日本語におけるのは異なり、ドイツ語では、「首かしげ」は本当にどう答えるべきかが分からない場合に現れる。つまり、ドイツ語では、「首かしげ」の身体表現には、日本語におけるようなコミュニケーション上の役割はないということが考察された。

これらの考察は、アジアゲルマニスト会議において、国際理解の問題として発表された。また、ドイツ認知言語学会においては、認知言語学の実証的研究の問題として発表された。インタビューの分析による研究方法は、ドイツ認知言語学会において新しい試みとして評価されたが同時に、分析者の主観に頼らざるを得ないことに由来する解釈の妥当性についての問題が指摘された。

この問題は、談話を撮影したビデオデータの分析という段階では、私たちがあらかじめ予期していたものであり、私たちはプロジェクトの第二段階として、日本語とドイツ語の母語話者に対するプライミングテストを行って、議論に客観性を持たせるための工夫を凝らした研究を行った。

この第二段階の研究は、実は、ビデオデータが使えるということで使用したソフトウエ

アが頻繁にトラブルを起こし、プログラムの調整、メーカーとのやり取りに時間を取られたために、必ずしも順調には進まなかった（日本語とドイツ語の被験者数に差があるのは、ドイツに出張して実験を行う作業をしたので、リスクを考えて被験者を多めに取ったからである）。

日本語母語話者を対象にした実験結果を分析した結果、私たちの第一段階での考察に対応して、状況に応じた質問に対応する身体表現の適切さについての判断の差が観察された。ただし、今回の実験では、「強い首ふり」と「弱い首ふり」について、はっきりとした判断の差が見られなかった。

これらの分析・考察の結果は、第12回日本語用論学会において発表された。

ドイツ語の母語話者に対して行った実験の結果は現在さらに詳しく分析中であるが、やはり、「強い首ふり」、「弱い首ふり」、「首傾げ」、「うなづき」、「しかめ顔」の身体表現に動機づけられた否定の認知がそれぞれに有意であり、首ふりに動機づけられる否定の重要性などは日本語とほぼ同じであること、「うなづき」の身体表現が、日本語におけるのと似たように、否定の関係する疑問や、助言の意味での修辞疑問に対して出やすいことなどが分かってきた。

この研究の成果は、今年の十月にブレーメンで行われるドイツ認知言語学会で発表されることが決まっている。

私たちは今後さらに、今回の研究で得られた結果について分析を深めるとともに、方法を精緻化していかなければいけない。他方、私たちのこれまでの研究によって、認知の内実を実験的な手法によって、実証的に探っていく、という、認知言語学を実証科学の一分野として確立していく試みを企て、実証的な言語研究の可能性の一つの方向を示すことができたのではないかと、私たちは確信している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4件)

1 Hiroyuki Miyashita, Yoshiharu Takeuchi & Stephanie Schmaus: Negation und körperliche Ausdrücke. アジア・ゲルマニスト会議 2008 金沢大会記録論集。

iudicium/München, in press (2010 刊行予定)、査読有。

2 Yoshiharu Takeuchi & Hiroyuki Miyashita: Negation as Embodied Cognition - What Co-occurring Bodily Expressions Reveal about Negation. 金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇、第2号 2010年、1-21. 査読無。

3 Takeuchi, Yoshiharu & Miyashita Hiroyuki: Körperliche Ausdrücke als Fenster der Kognitionen - Ein Versuch der Beschreibung der Negationskognition auf audiovisueller Basis - In: Neue Beiträge zur Germanistik 7/1, 2008年、124-139. 査読有。

4 竹内義晴・宮下博幸: 否定の認知の身体的基盤についての、言語表現と身振り・表情の共起実験による研究. 日本認知言語学会論文集 8, 2008年、450-459. 査読無。

[学会発表] (計 5 件)

1 竹内義晴・宮下博幸: 身体によって表現される否定とコミュニケーション — 質問に対する反応としての身体表現の動画情報を使ったプライミングテスト実験にもとづく考察、第12回日本語用論学会、2009年12月5日、龍谷大学深草キャンパス(京都府)

2 Takeuchi, Yoshiharu & Miyashita, Hiroyuki: Negation als körperlich fundierte Kognition - Aus einer Betrachtung der mit sprachlichen Äußerungen kookkurrierenden Gestik、ドイツ認知言語学会、2008年9月26日、ライプツィヒ大学(ドイツ連邦共和国)

3 Hiroyuki Miyashita, Yoshiharu Takeuchi & Stephanie Schmaus: Negation und körperliche Ausdrücke. アジアゲルマニスト会議、2008年8月27日、金沢星稜大学(石川県)

4 Takeuchi, Yoshiharu & Miyashita, Hiroyuki: Mimik und Gestik als Fenster der Kognition und des Gemüts、第35回日本独文学会語学ゼミナール、2007年8月29日、コープ・イン・京都(京都府)

5 竹内義晴・宮下博幸: 否定の認知の身体的基盤についての、言語表現と身振り・表情の共起実験による研究、第8回日本認知言語学会、2007年9月23日、成蹊大学(東京都)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹内 義晴 (TAKEUCHI YOSHIHARU)
金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号: 10163388

(2) 研究分担者

宮下 博幸 (MIYASHITA HIROYUKI)
金沢大学・歴史言語文化学系・准教授
研究者番号: 20345648